

群馬県北群馬郡榛東村

なが く ぼ

# 長久保古墳群



2024

駒澤大学文学部歴史学科考古学専攻  
榛東村教育委員会

## 榛東村の位置と周辺の環境

群馬県北群馬郡榛東村は、群馬県のおおよそ中央部、村の名前からわかるように榛名山の東麓に位置しており、東南東の方向に傾斜しています。榛名山東麓に位置するという特質上、火山の影響を受けた地形が村内には数多く存在しています。長久保古墳群は、この榛東村の東部に立地しており、その周辺には高塚古墳などが位置しています。

(井田)



図1 榛東村および長久保古墳群の位置（『榛東村誌』より出典）

## 分布・概要

長久保古墳群は、榛東村新井に所在し、村内を流れる八幡川右岸の相馬山を発生源とする火砕流堆積物(陣場火砕流堆積物)によって形成された舌状<sup>ぜつじょうきゅう</sup>丘上に位置します(久保ほか 2011)。本古墳群は、舌状丘の東側丘頂部から南側斜面にかけての標高 190～210mの範囲に築造された、前方後円墳 2 基、円墳 20 基の計 22 基の古墳で構成されています(図 2)。

これらの古墳に採用される埋葬施設は、すべて横穴式石室です。そのうち、石室平面形態に基づいて両袖石室 15 基、無袖石室 2 基、不明 3 基に分類することができます。また、石室の構築には、一部に山石が見られるものの大部分に河原石を使用し、それらを加工せず自然のまま積み上げた自然石乱石積みです。

出土品については、14・27b・33・36 号墳から埴輪が出土したほか、須恵器や土師器、鉄刀や鉄鏃などの武器類、馬具、耳環や玉などの装身具があります(表 1)。(福田)

## 調査経過

長久保古墳群の発掘調査は、住宅団地を造成する計画に伴い、昭和 51 年 12 月から昭和 53 年 5 月まで実施されました。この地域には古墳群が存在し、昭和 49 年の群馬県教育委員会による分布調査では、総数 42 基の古墳が想定されました。造成計画に基づき、古墳の現状保存を基本とし、やむを得ない場合のみ記録保存を行う方針が立てられました。大和ハウス工業株式会社は日本窯業史研究所に調査を委託し、群馬県教育委員会の指導の下で調査を実施しました。この結果、当初想定された 42 基の古墳のうち、22 基が確認されました。(趙)



図2 長久保古墳群分布図

表1 長久保古墳群一覽表

古墳名	墳形	規模 (m)	周溝	葺石	天井石残存状況		現状	石室	石室内法 (cm)		
					玄室	羨道			玄室長	奥幅	中幅
K-1号墳	円	17	西、北	有	1石	無	記録保存	両袖	500	160	176
3号墳	円	16	北	有	無	2石	保存	両袖	297	198	210
4号墳	円	9	北半	有	3石	3石	保存	両袖	310	160	180
7号墳	円	9	北半	有	無	無	保存	両袖	143	118	134
10号墳	円	18	無	不明	無	1石	記録保存	無袖	343	88	95
14号墳	円	25	不明	不明	無	無	記録保存	不明	※350	133	※150
15号墳	円	10	不明	不明	無	無	保存	両袖	330	178	183
19号墳	円	9	不明	不明	無	無	保存	両袖	255	174	183
21号墳	円	16	西、北	有	4石	3石	保存	両袖	472	200	238
22号墳	円	9	北半	有	無	3石	保存	両袖	290	190	200
25号墳	円	10	無	有	1石	無	保存	無袖	289	130	140
27b号墳	円	9	西、北	有	無	無	記録保存	両袖	260	150	120
28号墳	円	18	北半	有	無	無	保存	両袖	280	155	157
29b号墳	円	9	不明	不明	無	無	記録保存	両袖	190	105	90
31号墳	前方 後円	表2 参照	西、北	有	3石	3石	保存	両袖	400	250	250
33号墳	円	9	不明	有	無	無	保存	両袖	225	142	144
34号墳	円	10	西	有	無	2石	保存	両袖	315	177	190
36号墳	前方 後円	表2 参照	西、北	有	不明	不明	保存	不明	不明	不明	不明
37号墳	円	不明	不明	不明	不明	不明	保存	不明	不明	不明	不明
38号墳	円	9	北半	有	無	無	保存	不明	※280	不明	※145
39号墳	円	7	北半	有	無	無	保存	不明	※240	不明	※120
40号墳	円	※9	不明	不明	無	無	保存	両袖	230	153	158

表2 前方後円墳の規模 (m)

古墳名	墳丘長	後円部径		くびれ部幅		前方部幅	
		上段丘	下段丘	上段丘	下段丘	上段丘	下段丘
31号墳	52.5	18	28.6	9	15	15.5	33
36号墳	38.5	21	28	12	14	13.5	22

※は推定値

				開口 方向	出土遺物
前幅	羨道長	玄門幅	羨道幅		
137	467	92	※73	南	須恵器(無蓋高坏、高台付坏、甕)、轡、鉄刀、鉄鏃、耳環、人骨、歯
189	※360	84	※105	南	須恵器(不明)、鉄釘、鉄製品、装飾金具、人骨
175	385	100	120	南	須恵器(甕)、土師器(坏)、刀子、人骨
136	320	77	95	南	土師器片(不明)
90	164	80	60	西南西	鉄片、耳環、管玉、ガラス小玉、人骨、歯
不明	※300	不明	不明	南	円筒埴輪、形象埴輪(鞍、盾、家)、鉄刀、鉄片、金銅製品
178	287	105	105	南	金銅製柄頭、鉄鏃、勾玉、管玉、滑石製白玉、耳環、人骨、歯
150	※200	95	不明	南	鉄製品、耳環、人骨、歯
183	353	120	102	南	須恵器(坏蓋、坏身、坏G蓋、無蓋高坏、提瓶、平瓶、壺、壺)、土師器(坏)、鉄刀、鉄製品、人骨
170	267	104	80	南	須恵器(高坏、甕)、土師器(坏)、鉄刀、刀子、鉄鏃、耳環、人骨、歯
120	235	117	※85	南	須恵器(提瓶、壺、甕)、土師器(坏)、鉄刀、鉄鏃、鉄片、耳環
115	199	80	90	南	円筒埴輪、須恵器(甕)、土師器(坏)、鉄刀、耳環、切子玉
132	260	98	90	南	鉄刀、鉄鏃、耳環、人骨、歯
75	162	70	75	南	鉄刀、鐔、責金具
215	370	155	110	南東	須恵器(坏G身、有蓋高坏、提瓶、壺、甕)、土師器(坏)、鉄刀、鉄鏃、小型金具、責金具、耳環、人骨
142	189	76	78	南	鉄刀、鉄鏃、耳環、切子玉
162	286	95	73	南	須恵器(提瓶、平瓶、壺、甕)、土師器(壺、甕)、鉄鏃、鉄釘、耳環、人骨、歯
不明	不明	不明	不明	※南	円筒埴輪、形象埴輪(人物、馬)、須恵器(甕)
不明	不明	不明	不明	不明	不明
不明	190	※90	80	南	耳環、砥石
不明	※200	不明	70	南	須恵器(提瓶、甕)、土師器(坏)
150	※180	※80	※90	南	鉄鏃、耳環

## 長久保 3 号墳

長久保 3 号墳は、古墳群の最東端に立地する直径 16m の円墳であり、現在でも現地で保存されています。本古墳は、第 2 次世界大戦中に旧陸軍により燃料貯蔵壕が掘られたものの、開墾されなかったため墳丘の残りは比較良好でした(写真 1)。墳丘裾には葺石が確認されていますが、燃料貯蔵壕にするために一部の葺石が除去された可能性があります。また発掘調査で周溝は確認されませんでした。

埋葬施設は、南向きに開口する両袖石室です。平面形態は長方形であり、石室石材は河原石を主体とする自然石乱石積みです。

出土遺物は、玄室内から須恵器、土師器片、鉄釘、火を受けた骨片が出土したほか、閉塞石の下から性格不明の比較的新しい鉄製品 2 点や、木棺の装飾金具が出土しています。(飯塚)



写真 1 長久保 3 号墳前庭部

## 長久保 14 号墳

長久保 14 号墳は丘陵の最高所に立地する直径 25m の円墳です。現在は墳丘の東および南側は開墾により削平されています。また葺石は確認できず、周溝に関しても痕跡は認められません。

埋葬施設は南側に開口する横穴式石室となっています。平面形に関しては石室の奥壁、掘り方等により推定算出した中軸線を延長すると、墓道の西側に到達するため両袖ではないと考えられ、残存する壁と石室の掘削方法から全長約 6.5m の不整長方形の石室と考えられます。また石材は主に河原石を使用しているが、積み方に関しては不明です。

遺物に関しては、表土中より多数の円筒、形象埴輪片が出土しており埴輪が樹立していたと考えられます。石室内埋土より少量の鉄片、金銅製品の破片を出土するのみであり、石室掘方の奥壁中央から西寄りの盛土中より鉄刀が 1 点出土しています。(田中)



写真 2 長久保 14 号墳横穴式石室

## 長久保 21 号墳

長久保 21 号墳は、長久保 14 号墳などが立地する丘陵から分岐し南に派生した高まりに築造された直径約 13m の円墳で墳丘には葺石が確認され、現在でも現地で保存されています。

埋葬施設は、南側に開口する横穴式石室です。石室は全長約 8 m で両袖石室を採用しており、平面形態は長方形を呈しています。石室石材の大部分は河原石が使用されており、自然石乱石積みとなっています。

出土遺物は、玄室内から少量の鉄製品、土師器・須恵器片、人骨片が出土しているほか、前庭部からは土師器坏・高坏、須恵器甗、鉄刀 1 点などが出土しています。(井田)



写真 3 長久保 21 号墳前庭部

## 長久保 25 号墳

長久保 25 号墳は、北東から延びる舌状丘南端の標高約 225m に立地する直径 10m の円墳です。本古墳は、すでに調査時には削平や盗掘を受けており、葺石や周溝の有無については確認されていません。現在は、墳丘の一部と石室を構築していたと考えられる石材が確認できます。

埋葬施設は、南側に開口する横穴式石室です(写真 4)。石室形態は、古墳群内で本古墳と長久保 10 号墳でのみ確認できる無袖石室を採用しています。玄室平面形は、中央部が膨らむ胴張りです。石室は、主に河原石を使用し、自然石乱石積みで構築されています。

出土遺物は、石室閉塞石付近から須恵器提瓶 1 点(写真 5)や鉄鏃が出土したほか、閉塞部付近の覆土中から耳環 1 点、鉄刀片、鉄鏃片が出土しています。(福田)



写真 4 長久保 25 号墳横穴式石室



写真 5 須恵器提瓶出土状況

## 長久保 31 号墳

長久保 31 号墳は、同じく前方後円墳である長久保 36 号墳の東、古墳群の中心部に位置します。墳丘長は、52.5m と本古墳群の中で最大規模を誇る前方後円墳です。

墳丘は、葺石を巡らせた上段丘と自然地形に盛土をした下段丘から構成されています。北西から北側にかけて周溝が巡り、東から南東部にかけては斜面を一部掘削し、墳丘と周囲区画が設けられています。また、墳丘は現在でも現地で保存されています。

埋葬施設は、南東側に開口する全長約 7 m を測る両袖の横穴式石室を採用します。石室は、主に河原石を使用した自然石乱石積みで、壁面を天井部に向かうほど内側に傾斜させて構築する持送式架構もちおくりしきかこうの特徴がみられます。また、前庭部はハの字状に開きます。

石室内からは、鉄刀や鉄鏃などの武器、金具類、耳環の他、少量の人骨が出土しました。また、前庭部からは、土師器や須恵器有蓋高坏・提瓶ゆうがいたかつき ていへいが出土しており、葬送儀礼の際に使用されたのではないかと考えられます。(小林・福田)



写真 6 長久保 31 号墳前庭部

## 長久保 33 号墳

長久保 33 号墳は、前方後円墳である長久保 31 号墳東側斜面の標高約 280m に築造された直径約 9m の円墳です。葺石については、羨門付近で確認されました。現在は、墳丘の一部を見ることができます。

埋葬施設は、南側に開口する全長 4.41m の両袖石室を採用した横穴式石室です(写真 7)。石室は、主に河原石を使用した自然石乱石積みで構築されています。また、本古墳では、石室入口部から羨道にかけて石室を塞いだ石材(閉塞石)が良好な残存状況であったほか、羨門手前には地山を掘くぼめた墓道が確認されています。

出土遺物については、玄室内で耳環 2 点や人骨、羨道入口付近で鉄鏃 2 点、墳丘南側から墓道にかけて少量の須恵器・土師器が確認されています。

(福田)



写真 7 長久保 33 号墳横穴式石室全景



## 長久保 36 号墳

長久保 36 号墳は、長久保 10 号墳の東に位置する墳丘長約 38m の前方後円墳です。墳丘には葺石が確認され、現在でも現地で保存されています。墳丘は盛土を盛り、葺石を葺いた上段と自然地形に若干の盛土を行った下段に分かれています。

埋葬施設については、調査区内からは発見することができていないことから形態や規模については不明です。

出土遺物は須恵器甕と埴輪が出土しています。特に埴輪については、墳丘上において円筒埴輪列が確認されているのが特徴です。また、墳頂部からは少量の形象埴輪片が出土していますが、詳細は明らかではありません。(井田)



写真 8 長久保 36 号墳円筒埴輪列

## 長久保 39 号墳

長久保 39 号墳は長久保 38 号墳の東約 9m に位置する円墳で、径約 9m です。周溝は西から北にかけて、墳丘には河原石と少量の山石を用いた葺石が葺かれています。

埋葬施設は南に向かって開口する横穴式石室ですが(写真 9)、石室は破崩しており、床面と羨道の基底が残存するのみです。石室は長さ約 520cm、奥幅 300cm、入口が約 185cm の掘り方内に構築されています。羨道は長さ約 200cm、幅約 70cm です。羨道入口の前方には「八」字型の墓道が約 1m 確認されました。

出土遺物は、石室の南壁側と前庭部から須恵器の甕破片、少量の土師器の坏破片が出土しました。

(趙)



写真 9 長久保 39 号墳横穴式石室

## 長久保 31 号墳の横穴式石室

墳丘長 52mと古墳群内で最大規模をほこる 31 号墳の後円部からは、両袖の横穴式石室が天井石まで残る良好な状況で検出されました(第3図)。玄室は長さ 4.0m、幅 2.5m、高さ 2.5mをはかり、羨道側が少しすぼまる長方形をしています。玄室と羨道の天井高さはほとんど同じですが、玄室と羨道の境から 1.1m外の天井からは 0.7m前後の板石(まぐさ石)が下に向けて突出していました。羨道長は 3.7mです。同じ位置の床面にも 0.5mの段差があり、外側が高くなっています。このような羨道天井の突出は、高崎市の八幡観音塚古墳(前方後円墳：97m)・金古愛宕山古墳(前方後円墳?)、前橋市総社二子山古墳(前方後円墳：90m)にもみられる特徴です。一方、長久保古墳群に近い高塚古墳(前方後円墳：60m)の横穴式石室にはみられません。高塚古墳は築造後に榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP)が堆積しており、6世紀前半に築造されたとみられるのに対し、八幡観音塚古墳や総社二子山古墳は副葬品等から6世紀末ごろの築造となります。とくに総社二子山古墳前方部横穴式石室と31号墳の類似性は強く、八幡川水系に位置する両者の間には密接な関係があったと考えられます。(寺前)

## 長久保 31 号墳出土の須恵器有蓋高坏

長久保 31 号墳の前庭部から出土した須恵器有蓋高坏は、長脚 2 段 2 方透かしで口径 12.8 cm、脚部径 14.4 cm、器高 15.2 cmと推定されます。脚部に穿たれた透かしは長方形で、2 条の沈線で区画され下段の透かしの下位には 1 条の凹線が巡ります。脚端部は外へ開く形状で、この形態的特徴は群馬県内で生産された須恵器高坏に多く認められます。なお、群馬県内から出土する須恵器高坏は無蓋高坏が多い傾向にあり、有蓋高坏の出土は非常に少ない点が地域的な特徴です。

この有蓋高坏の生産地は特定できませんが、胎土や形態の特徴から群馬県内で生産されたものと考えられます。また、この須恵器の時期は、長脚 2 段 2 方透かしである点や形態的特徴から、6 世紀末から 7 世紀初頭頃(陶邑TK209 型式期並行)と考えられます。この有蓋高坏が 31 号墳の初葬に伴うものとするれば、31 号墳はこの地域において最後の前方後円墳であったと考えられます。

また、①31 号墳では土器が横穴式石室内ではなく前庭部から出土していること、②群馬県内では出土事例が少ない有蓋高坏が出土していること、③有蓋高坏は複数個体ではなく 1 点のみの出土であることなどは注目されます。これは、31 号墳で執り行われた葬送儀礼を考えるうえで、非常に重要な意味をもつと考えられます。(藤野)

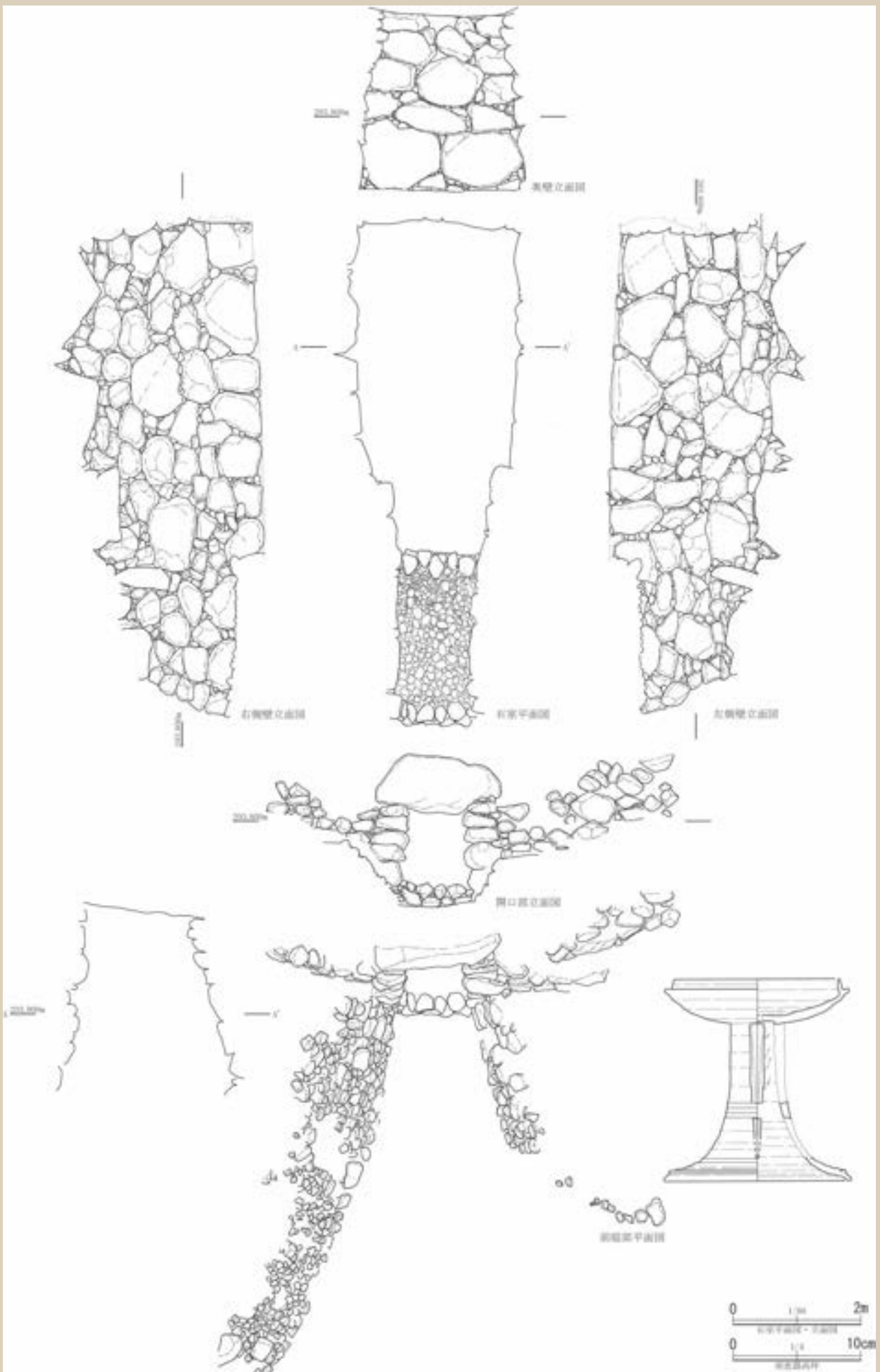


图3 長久保 31 号墳石室平面図・立面図、長久保 31 号墳出土須恵器高坏



写真 10 長久保 14 号墳出土鞍形埴輪



写真 11 長久保 36 号墳出土円筒埴輪



写真 12 長久保 14 号墳出土土盾形埴輪

## はにわ 埴輪

長久保古墳群では、14・27b・33・36 号墳から埴輪が出土しており、特に 14 号墳と 36 号墳からは多くの埴輪が出土しており、14 号墳では、盾形や鞍形たてがた ゆぎがたの器財埴輪のほか、家形埴輪が出土しています。盾形埴輪は、欠損している部分が多いものの左右対称きよしの鋸歯文を確認できます。家形埴輪についてはいずれも破片であり、全体像が復元できる個体はありません。36 号墳では、数多くの円筒埴輪が出土しています。基部から口縁部までを復元できる個体もあり、3 条の突帯と円形の透かし孔あなが施されています。円筒埴輪の外表面調整はほとんどがタテハケですが、一部の個体では二次調整としてヨコハケが施されています。(井田)

## 須恵器

須恵器とは、今から約 1600 年前の 4 世紀末から 5 世紀初頭頃に朝鮮半島からもたらされた技術を用い、日本列島で生産された陶質の土器です。それ以降、須恵器は土師器とともに古墳や集落などで用いられていました。長久保古墳群でも、K-1・3・4・21・22・25・27b・31・34・36・39 号墳から須恵器の出土が確認されています。本古墳群で出土する須恵器は、横穴式石室内ではなく前庭部からの出土がほとんどであり、須恵器が横穴式石室内から出土した高崎市綿貫観音山古墳や同市八幡観音塚古墳とは異なった様相が確認できます。加えて、本古墳群から出土した須恵器の器種は、甕や瓶類などの液体貯蔵具が多く、その中でも大甕や甕が特に多いという特徴もあります。また、本古墳群から出土し



写真 14 長久保 21 号墳出土甕

た須恵器は、形態や器種の構成から 6 世紀後半から 7 世紀に製作されたものが中心であると考えられます。

本古墳群から出土した須恵器のなかでも、21 号墳出土の無蓋高坏や提瓶・平瓶・甕、25 号墳出土の提瓶、31 号墳出土の有蓋

高坏が注目できます。21 号墳から出土した須恵器は、本古墳群のなかで最も多様な器種が出土しており、古墳から出土する須恵器の器種構成を示します。また、墳丘全長 52m の前方後円墳である 31 号墳から出土した有蓋高坏は、脚部に 2 段の長方形透かしが 2 方向に施されており、その特徴や形態から 6 世紀末から 7 世紀初頭頃のものと考えられます。31 号墳からは他にも平瓶や甕といった様々な器種の須恵器が出土しており、古墳に埋葬された人物に対して何らかの儀礼が行われたのではないかと考えられます。

これらの須恵器は、群馬県内で生産されたもののほか、愛知県名古屋市を中心に展開する猿投窯跡群や、静岡県湖西市に位置する湖西窯跡群といった他地域で生産された製品も確認できます。

(飯塚・福田)



写真 13 長久保 21 号墳出土高坏

## 馬具

長久保古墳群ではK-1号墳から馬具の轡くつわが出土しています。轡は馬の口にかますはみと銜の先に取り付ける引手ひきて、銜の脱落を防ぎ面繫おもがいに連結する鏡板かがみいたによって構成されます。銜は長さ約8cmで中央にて繋ぐ形ですが片方が欠けており、引手は長さ約12cm、楕円形の鏡板は長径6.5cmです。K-1号墳から出土したものは二連小環銜しょうかんはみと立聞たちぎきが付いた素環鏡板付轡そかんかがみいたつきくつわだと考えられ、時期に関しては引手・銜に直接銜が取り付けられていることから6世紀後半以降のものと想定されます。全国的にこの形態の轡は多数確認されており、当時では主流な形態であったと考えられます。(田中)



写真 15 長久保 K-1 号墳出土轡



写真 16 長久保 31 号墳出土耳環



写真 17 長久保古墳群出土玉類

## 装身具

耳飾りである耳環じかんは6世紀の横穴式石室墳において、副葬品としてよく見られます。長久保古墳では、K-1・10・15・19・22・25・27b・28・31・33・34・38・40号墳から耳環が出土しました。そのなかで、長久保22・28・31号墳からそれぞれ6点出土し、これらは長久保古墳群の中で最も多くの耳環が出土した古墳です。耳環は直径約2cm～3cmで、材質は鍍金銅芯または銀鍍銅芯です。

15号墳からは、勾玉9点が出土しました。そのうち7点はメノウ製で(写真17)、長さは2.5cm～3cmを測ります。残りの2点は、それぞれ蛇紋岩とヒスイ製です。27b号墳からは、水晶製切子玉が1点出土しました。また、10号墳・15号墳からは管玉・ガラス白玉・滑石製白玉・ヒスイ丸玉・および4点のガラス製小玉が出土しました。これらの玉類と6点の耳環は、榛東村耳飾り館で展示されています。(趙)

## 長久保古墳群からみた東国の古墳時代社会

石室の形態や須恵器の分析から長久保古墳群は、6世紀末から7世紀にいとなまれた古墳群であることが明らかになりました。円筒埴輪が樹立されていた36号墳(前方後円墳：38m)は、6世紀末に築造された31号墳(前方後円墳：51m)に先行するとみられ、他にも須恵器から6世紀後半にさかのぼる可能性のある古墳もありますが、さらなる検討が必要です。

長久保古墳群の北側約1.5kmには、利根川流域最奥の前方後円墳である吉岡町大藪城山古墳(前方後円墳：47m)があります(図4)。埴輪を有しており、盛土下にはHr-FPが検出されていることから、6世紀後半以降の築造とみられます。古墳群の南側約1.4kmに所在する高崎市金古愛宕山古墳を含めて、榛名山東麓には高塚古墳(前方後円墳：60m)の築造を契機として50m前後の前方後円墳と横穴式石室を有する小古墳が群集するようになるのです。

長久保古墳群のほとりを流れる八幡川を3.5kmほど下った場所には東国屈指の古墳群である前橋市の総社古墳群が展開しています。5世紀後半に築造された総社遠見山古墳(前方後円墳：70m)を口火に、6世紀初頭には王山古墳(前方後円墳：76m)、6世紀末には総社二子山古墳(前方後円墳：90m)が築かれます。群馬県(上毛野)ではこの時期以降、前方後円墳は造られなくなり、他の古墳群では大きな古墳の築造は続かないのですが、総社古墳群は例外です。7世紀にはいっても総社愛宕山古墳(一辺56m)、宝塔山古墳(一辺60m)、蛇穴山古墳(一辺40m)といった巨大な方墳が継続して造られます。長久保31号墳と総社二子山前方部の横穴式石室の類似していることから、両者の被葬者には密接な関係があったと考えられるので、7世紀に継続する長久保古墳群の被葬者たちも、上毛野の頂点に君臨した総社古墳群の政治勢力と結びつき、その勢力の一翼を担っていたのではないのでしょうか。長久保古墳群のさらなる検討によって、その具体像の解明が期待できます。(寺前)



図4 長久保古墳群と総社古墳群

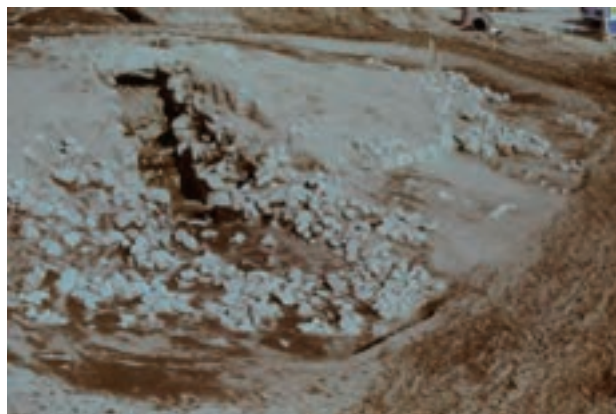


図5 長久保古墳群の現在



## 写真で見る長久保古墳群

今回の調査では、昭和 51 年から 53 年にかけて行われた発掘調査で撮影された写真が、数多く残されていることがわかりました。これを受け、リバーサルフィルムでのデジタル化作業を行いました。ここでは、これらの写真の中から一部を紹介し、発掘当時の長久保古墳群を感じていただければと思います。



1. 長久保 K-1 号墳 墳丘・横穴式石室



2. 長久保 K-1 号墳 墳丘断面写真



3. 長久保 3 号墳 遠景



4. 長久保 3 号墳 横穴式石室開口部から奥壁



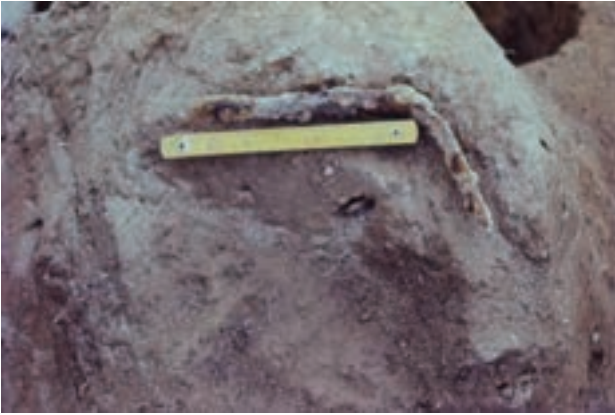
5. 長久保 4 号墳 横穴式石室開口部



6. 長久保 10 号墳 天井石



7. 長久保 10 号墳 横穴式石室側壁



8. 長久保 14 号墳 鉄釘出土状況



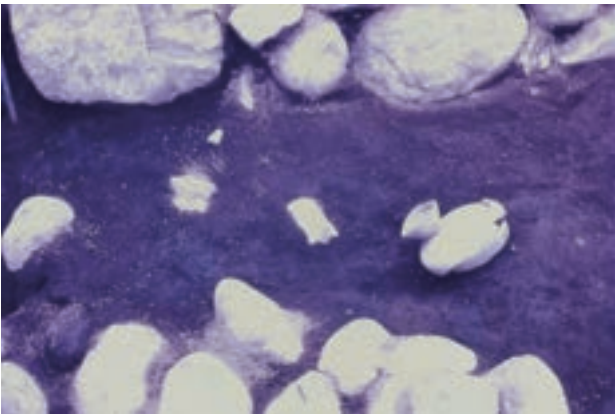
9. 長久保 15 号墳 勾玉出土状況



10. 長久保 15 号墳 柄頭出土状況



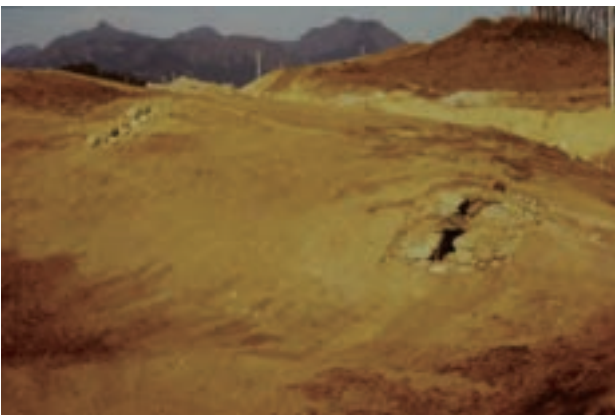
11. 長久保 21 号墳 土器出土状況



12. 長久保 21 号墳 須恵器平瓶出土状況



13. 長久保 22 号墳 横穴式石室



14. 長久保 25 号墳 遠景



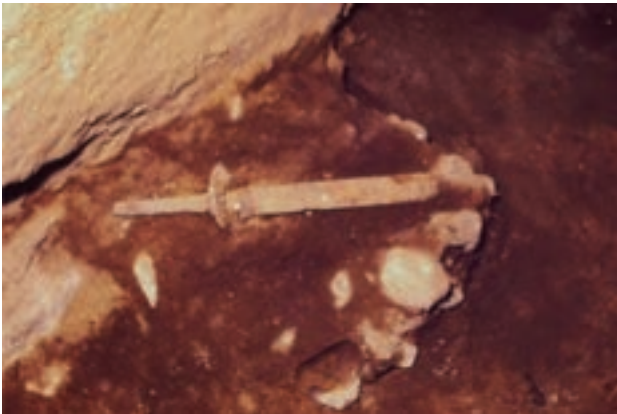
15. 長久保 31 号墳 横穴式石室



16. 長久保 31 号墳 遠景（前方部から）



17. 長久保 31 号墳 くびれ部葺石検出状況



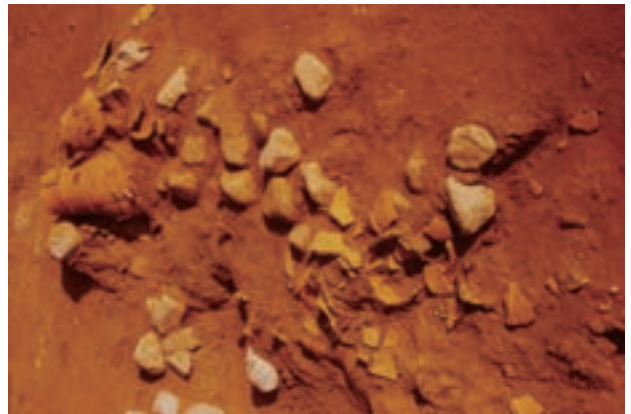
18. 長久保 31 号墳 鉄刀出土状況



19. 長久保 34 号墳 須恵器出土状況



20. 長久保 36 号墳 くびれ部葺石検出状況



21. 長久保 36 号墳 埴輪出土状況



22. 作業風景



23. 長久保古墳群からみた榛名山

## 引用・参考文献

- 久保誠二・鈴木幸枝・中島正裕・宮沢公明 2011「榛名山南東麓の地質」『群馬県立自然史博物館研究報告』15 群馬県立自然史博物館 115-127 頁
- 久保誠二・鷹野智行・湯浅成夫 2011「榛名山東麓」『良好な自然環境を有する地域学術調査報告書』37 群馬県立自然史博物館 123-132 頁
- 群馬県古墳時代研究会 1998『群馬県古墳時代研究会資料集第3集 群馬県内の横穴式石室(西毛編)』群馬県古墳時代研究会
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992『神保下條遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化事業団調査報告第137集
- 榛東村誌編さん室 1988『榛東村誌』
- 日本窯業史研究所 1978『長久保古墳群発掘調査略報』
- 深澤敦仁 2007「上野地域における群集墳構造の推移」『考古学リーダー12 関東の後期古墳群』六一書房 71-87 頁
- 三浦茂三郎 2018「群馬県における初期群集墳の主体部と副葬品」『考古学集刊』第14号 明治大学文学部考古学研究室 41-61 頁
- 右島和夫 1983「群馬県における初期横穴式石室」『古文化談叢』第12集 九州古文化研究会 297-330 頁
- 右島和夫 1990「古墳から見た5, 6世紀の上野地域」『古代文化』第42巻第2号 25-38 頁
- 右島和夫 2004「群集墳の築造背景-竪穴式石槨墳から横穴式石室墳への移行過程-」『福岡大学考古学論集-小田富士雄先生退職記念-』小田富士雄先生退職記念事業会 363-377 頁
- 若狭徹 2004「1. 足門寺屋敷遺跡をめぐって」『足門寺屋敷Ⅲ遺跡、三ツ寺大下Ⅴ遺跡、保渡田薬師塚古墳』群馬町埋蔵文化財調査報告第67集 群馬町教育委員会 89-93 頁

## 編集

飯塚麻結・趙 亦蒙

## 執筆

寺前直人・藤野一之・飯塚麻結・井田樹希・小林義弘・田中優作・趙 亦蒙・福田有希

# ながくほ 長久保古墳群

発行日 2024年10月5日  
発行 駒澤大学文学部歴史学科考古学専攻・榛東村教育委員会  
編集 駒澤大学文学部歴史学科考古学専攻  
住所 〒154-8525 東京都世田谷区駒沢 1-23-1

このリーフレットは「駒澤大学令和6年度駒大生社会連携プロジェクト」の助成を受けて作成しました。